

---

# ネギま in 坊っちゃん

緋翠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ネギま・n坊っちゃん

### 【Zコード】

Z5378Z

### 【作者名】

緋翠

### 【あらすじ】

坊っちゃんがネギまの世界に入っちゃった？

「リオン大丈夫か？」  
「大丈夫だ！エヴァ」「なら良いが」

『僕は空氣ですか？』

「…………居たのかシャル」

『うわあああん坊っちゃんのバカアアア！』

## 設定（前書き）

まあ坊っちゃんの説明ツス

## 設定

名前  
リオン マグナス  
偽名  
ジュー・ダス

TOD2の物語が終つてから麻帆良学園にトリップしてきた。

なぜか麻帆良学園はシャルティエも一緒に飛ばされていたので武器はシャルティエ。

外見はジュー・ダスの仮面無しのまま。入学後の普段着はカジュアルな黒の服

使用出来る魔術はTOD D2のを共通で使える。

技も同じ

始動キー

シャル・シェル・シャルティエ・シェルシエラ

適用属性 間、光

相反する二つの属性が得意。

ネギよりも先にエヴァに弟子入りしている。

この世界の魔法を学び始めたのは、エヴァに声をかけられたため。

晶術が使えるのでなかなか早くマスターする。

発動体は指輪。

中に持つてきたレンズが入っているため、シャルがいなくても晶術が使える。

しかしこのレンズではTOD2の晶術しか使えない。

## プロローグ（前書き）

他に書いている小説でもやつてあるキャラクター名言一覧

言つて欲しい

こんなセリフあるよ

なんて方が居たらそのキャラクターの名前、作品、名言を教えて下さい

書きます

つてな訳で今日の名言

例え何度生まれ変わっても必ず同じ道を選ぶ！！

『トロリオン・マグナス』

お前にんなこと言つてたのか？

『聴き手ヴァンジョン・A・K・マクダウェル』

ええ、確かに言つてましたよ

『リオンの相棒（可哀想な）シャルティ』



## プロローグ

次元の狭間

ローーとカイル達の前から消えた後、

(僕はどうなるんだ。このままリオンとして消えるのかジューダスとして漂つか?)

(まあどうでもいいか。歴史は元に戻したんだ。これでスタンも生きているだろ?)

(なんだ? あんな所に光が?)

(行つて見るか?)

そして歩いて近づくと、

急に光がリオンを包み込む。

(なんだこれは?)

そして光が消えた時リオンはそこにいなかつた。

麻帆良学園 夜

ピカッ

光が落ちてきた。

「? なんだ行つて見るか?」

一人の長い刀を背負つた女の子がいた。

光が落ちてきた場所に向かうと。

一人の綺麗な男の子がいた。

(年は私寄りちょっと上だらう。)

「怪しい奴だし。武器を持つている。学園長に報告しにいくか?」

少女は駅の手を提げ上げ学園長室に向かった。

## 学園長室

「ど、訳なので連れて来ました。」

少女は学園長に説明をした。

「フオフオ、『苦労じやつたの』刹那くん。後はこの人が目覚めたら話を聞いてみるとあるかの？』

頭の長い老人は答えた。

「しかし何なんでしょうかね？ 学園結界も反応しなかつたんですね？」

メガネをかけた背の高いおじさんが言った

「高畠先生、大丈夫じゃよ。明日からはネギくんがくる。もしもの事が起る前に捕まえたんじゃ。何もないよ。」

メガネの人高畠にそう言つた時

「ハハー、（ううせう）だ。」

田を覚ました。

「学園長田を覚ました。」

刹那がやつれて学園長に知らせる

「ううは、ううだ。」

「ううは麻帆良学園じや。きみにこくつか聞きたい事がある。」

「なんだ？」

「きみは何者かね？なぜ学園結界の中に入れたんじや？」

「知らん。田が覚めたらこりこりた。」

「ふむ、嘘は言つてないよひじや。でもお前は？」

「ジユーダスだ。」

そう言つて園長は田を締め

「それは嘘だよ。本当に前は？」

そう言つてきた

「チツ！ リオン、リオン・マグナスだ。」

「わつか。」

「驚かないのか？」

僕はスタン達を裏切った者だから何か言われると思ったんだが

「なぜ驚くんじゃ？」

「僕は世界の裏切り者だぞ。」

「なんじゃって？そんな話し聞いた事ないがのう。」

「なつ、ソレはどうだ。」「

「ソレは日本の麻帆良学園じゃ。」

「まさか、別世界か？」

「ふむ、聞いてこる限りそうだらう。ソレせきみがいた場所とは違う世界じゃ。」

「せうか。」

「あまり荒てこのつ？」

「何の世界に未練はない。」

「ふむ、なら学園に通つてもいい。ソレの世界の事は何も知らないのじやうづ。」

「わかった。ありがたい。」

「ちよつと待つてください。『B』のクラスに入れる気ですか？」

「それはの、高畠先生、2—Aじや。」

「なつ、彼は男の子ですよ。」

刹那が言つ。

「あのクラスはなつめの子が多いクラスじや。それに馴染みやすい  
じやねつ。」

そう言われて刹那は黙つた。

「では、明日から新しい生活をしてもらひ。」

「すむ場所は？」

「刹那くんと一緒に部屋じや。」

「なつ、学園長ー。」

「あみこは彼の見張りをしてもらひ。」れなりここじやくひ。

「分かりました。行くぞ。」

そう言われてリオン達は出ていった。

刹那の部屋

「ただいま龍崎」

「お帰り刹那、誰だきみは？」

「今日から一緒にすむことになつたリオンだよろしく頼む」

そつ置いて刹那に説明を任せ部屋の奥に入つて行く。

(今日から新しい生活が始まるのか。少し楽しむか。)

次の日

刹那が田を覚めると、ここにおいが漂っていた。

(龍宮が料理しているのか?)

しかして下の布団をみると龍宮はまだ寝ていた。

(…じゃあ誰が?)

布団から起きキッチンに向かうと昨日一緒に住むことになった奴が料理している。

「む、起きたのか?」

声をかけてきた。

「ああ、何しているんだ?」

「見ての通り、朝食の準備だが?」

「なぜあなたがやっているのか聞いているんだ。」

「一番に田が覚めたから。」

「そ、うか」

「せひ、でもたれ。龍痴と云つたか？ そいつも起りや。」

「あ、ああ。」

「龍宮起そり。ご飯だぞ。」

「誰が作つたんだ。

「リオンだ。」

西行の歌題

「「「「ただそれも。」」」

そう言って朝食を三人で食べた。意外にも美味しかった。

そしてまた刹那はリオンを連れて学園長室に向かつた。

## 初めて会ひやつり（前書き）

今日の誓言

俺は君だけの英雄になるよ！

『TOD天然主人公カイル・デュナミス』

お前の仲間はなんと言うかあれだな……

『またしても聴き手エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル』

誓つた

『我等が坊っちゃんリオン・マグナス』

## 初めて会ひました

学園長室に行くと、子供に会つた。それにツインテールの女にロングのストレートの女にも会つた。

その後学園長に制服と生活費をもらひて着替えて子供の後について行く。

子供の名前はネギといひらしい。

あつ、後忘れてたけどシャルティエを学園長から返してもうつた。

『坊っちゃんひどい。』

どうやら一緒に来たらしい。

しかしこの世界の人には魔力がある奴には聞こえるらしく。全くやつかいだ。

まあだがこれで晶術が使える。

そんな事を考へて、机に向かって教室の前に着いた。

ネギが先に入り、トラップに引っ掛けられ、心配されている。

自己紹介がすんだらしい。  
名前が呼ばれた。

「シャル喋るなよ。」

『分かつてますよ坊っちゃん、ほら入りましょ。』

そう言つて教室に入った。

僕が入った瞬間騒がしかつた部屋が静かになる。

次の瞬間！

「　「　「　「　キヤー、カッコいい。」　「　「　「

教室の中はさながらなる。

そして落ち着いたところで

「僕の名前はリオン・マグナスだ。よろしく頼む。」

それだけ言つて僕自分の席に向かつた。

隣は刹那がいた。

「よひしへ。」

刹那がそう言つてきた

「ああよひしへ。」

それからクラスから質問攻めに会つたがそのお陰でクラス全員の名前を覚えた。  
さらに歓迎会もありなかなか楽しかった。

そうして1日目が終わった。夜

刹那達と一緒に見廻りをした。

「リオンなかなか人気者だつたな。」

龍宮がそう言つてきた。

「お陰で疲れた。」

刹那が

「向こうの世界では強い方だな。」

「そういえばリオンの実力を知らないな。強いのか?」

そんなことを話しながら見廻りを続けると。

魔物の気配がした。

その場にごくと悪魔が百体ぐらいいた。

「ここにいるのか？ 悪魔は。」

「こんな事は初めてだよ。」

「無駄口を叩くな行くぞ」

そう言って刹那は突っ込んで行った。

「はあ、行くぞシャル。」

リオンもシャルティエを出して刹那の後を追った。

龍宮は遠距離から銃をうち、刹那は

「神鳴流奥義、百花繚乱」  
確実に回つの悪魔を倒していた。

しばらくして回つの悪魔を倒し尽くした龍宮と刹那は合流した。

「リオンは？」

「あつちだ！」

走つてリオンの元に向かう一人。  
しかしそこでは凄い事が起つっていた。

「魔神剣」

剣圧が飛ぶ

「幻影刃、幻影回帰」

一瞬にして敵の後ろに回り込み斬りつける

「粉塵列破衝」

剣を擦り火花を散らす

「終わりだ塵も残さん、淨破滅衝炎」

剣から黒い炎が出て敵を浄化する

「……闇の炎に抱かれて消えろ。」

圧倒的な強さで悪魔を葬り去つている。

「何で言ひ強がだ。」

龍宮はそう言ひて刹那を見た。

刹那は一心不乱にリオンを見ていた。

そうして一〇分間にリオンは、すべての悪魔を倒していた。

「お疲れ。シャル。」

『坊っちゃんもお疲れ様です。』

「ふん、僕は疲れてなどいない。」

『まあまあ坊っちゃん、久々に戦つたんですから今日は休みましょ  
う。』

「そりだぞリオン、しっかり休め。」

龍宮が草むらからでそりひってきた。

「まあいい。帰るだ。」

そうして家に帰った三人。

「どうした刹那、ずっと喋ってないじゃないか？」

「リオンあの、わ、私に剣を教えてくれないか？」

刹那がやう言つてきた。

「・・・・・」

「やつぱりダメか？」

「・・・・・明日から早く起きる。朝早くにやるぞ。」

「ありがとう。」

「まあいい、だが厳しくやるぞ。」

それからリオンの日課に朝の修行が加わった。

初めてぬりえつみ（後書き）

感想等を書いてくれると嬉しいです

## ムカヒの田舎ご（繪畫集）

今日の咲

生きているのなら神様さえ殺して見せる

『西儀式』

私もか？

『ヒガア』

多分な

『リオン』

## Hカニアとの出会い

朝、リオンと刹那は、寮から出ていき世界樹広場の前に来ていた。

「よし、じゃあお前の実力を見よう。全力で来い。」

リオンの態度に起つたのか？

「行きます。怪我しても知りませんよ。」

それから30分ほど打ち合いで、

「分かつた。もういい。」

「な、何故だ？」

ようやく調子が出てきたのに。

「お前の実力が分かつたからだ。それに早くしなければ学校が始まつてしまつ。」

時計を見るともう八時だった。

始める前のラソンニングが長く時間がなくなっていたのだ。

「じゃあ、急いで帰つて学校に行くぞ。」

そう言つて一人は走り出した。

そして朝のHR

リオンと刹那は静かに席に座つてゐるが、周りはまだうるさかつた。

(シャルナミの煩ささだな。)

そんなことを考へてゐる内に、ネギが入つてきた。

「さ、起立。 気をつけ」

「あ・・ども・・・・・」

「礼」

「　　「　おはようございます。」　　」

「おはようございます。」

「着席。」

朝の挨拶が終わつた。

まったく子どもじやないのに。

一時間目は英語らしい。

何とかこの世界の字は読めるので普通に授業は受けれる。

ガヤガヤ

周りが騒がしかつた。  
耳を傾け話を聞くと、

アスナが保健体育以外バカだと言つことが分かつた。

そしてアスナがネギを掴むとネギが

「ハ、ハ、ハックション！」

くしゃみをした。

その瞬間アスナの服が脱げ

「／＼／＼」

「リオン見るな！」

刹那に田を塞がれた。

「リオンくんは見てないよね。」

まき絵にさう声をかけられた。

「ああ見てない。瞬間に手で塞がれたからな。」

やつとまき絵は安心した様に離れて行く。

「やはり女だけの場所だから疑われるのか？」  
刹那に聞くと

「ああ、貴方は鈍感ですね。」

やつらがわれてしまった。

その後僕は授業を受けるのが面倒だったので屋上に行つた。

『せっぱ外の空気はいいですね。坊っちゃん。』

「シャル、学校じゃ喋るなと言つただろ。誰に聞かれるか分からん」

そう言つて余話を終わらせようとしたのだが、

「ほつ、聞かれるどいつもなるのだ。」

「一・誰だー。」

見ると金髪の少女がいた。

「ハガーンジンソンアマクダウエルか?」

「そつだ。お前から微量だが力を感じる。だからついてきたのや。」

「そつか。」

「で？何が聞かれると困るんだ？」

「ふん！お前には関係ない。」

『坊っちゃんもしかしてこの人声が聞こえるんじゃないですか？』

「よく分からんが聞こえるぞ。それがどうかしたか？」

『やつた！坊っちゃんあの人達以外にも僕の声を聞いてくれる人がいました。』

「シャル少し静かにしろ。」

僕が一声そう言つとシャルは静かになった。

「貴様が何者なのか説明してもらおうか。」

「何故だ？」

「私が興味を持ったからさ」

それから僕達はエヴァの家に連れていかれた

エヴァの家に着き僕は抵抗する事を諦め説明をする

「フムそうか。」

「<sup>話</sup>は終わりだ。じゃあな！」

僕はそう言つて帰ろうとするが、

「まあ待て、お前魔法を習つ氣はないか？」

「なぜ僕が」

「お前には魔力を感じるからな。それに、こちりでは魔法が使えた  
方がいろいろ楽だと思うが？」

なるほど、と僕は思つてしまつた

「誰にだ。」

「私がだ。それにお前が気に入つたからな。」

「…………考えておく。」

そう言つて今度こそ僕は帰つた。

「リオン、どこに行つていた！」

刹那が聞いてきた。

「まったく学校もサボつて。」

僕はエヴァの所に行つていた事を話した。

「今度からちやんと話してから行つてください。」

「分かった、気を付ける。」

「ならいいです。では晩御飯の用意をしてください。」

「…………は？」

「昨日龍宮と話して決めたんです。家事はすべてリオンに任せます。」

「

「洗濯もか？」

「はいもちろん。」

「ふざけるなあー！貴様らこそになおれえ。」

それから僕は、一人に説教をして洗濯だけは一人にやらせる事にした。



## 忘れ物（前書き）

お気に入りに登録してくれる人がいるのは嬉しいですね

今日の名言

シロウ、貴方を愛しています

『Fateセイバー』

……マリアン

『リオン・マグナス』

何をしているんだ？

『落ち込んでいる坊っちゃんを慰めようとしているヒガマ』

## 忘れ物

あれから2日がたつた。  
その2日間何していたかと言つと

刹那との剣の修行

家事

夜の見回り

シャルの手入れ

プリンを食べる。

まあこんな事をやつていた。

だからあいつが言つていた事をすっかり忘れてしまっていた。

そのせいで今こんな事になってしまった。

「で？弟子入りの件の返答は？」

「.....」

僕はすっかり忘れていた。

「その顔は忘れていたな！」

「ウツ！悪い。忘れていた。」

『坊っちゃんが素直に謝つてる！』

僕はシャルのコアクリスタルに爪を立てて黙らした。

「ふん！やはりな。そんなことだらうと思つたよ。だから、茶々丸つれてけ。」

「はいマスター。」

ガシツ

僕は両手を持たれ動けない。

「待て、僕をどこに連れていく気だ？」

「私の家だ。」

そう言つて僕は有無を言わさず連れていかれた。

## エヴァの家

「着いたぞ。」

「何の様だ。急に連れてきて。」

「これば分かる。着いてこい。」

そして家の奥に入つて行くと。

ミニチュアの家があつた。

「何だこれは？」

「見れば分かる。先に行くから早く来いよ。」

そう言つてエヴァはミニチュアの家に近づくと。

ヒュンー！

消えた。

「マスターはこの中に隠ます。近くへ入れますので早く来てくださいね。」

ヒュンー！

茶々丸も消えた。

「はあ、行くかシャル。」

『そうですね、行きましょうか。』

そうして僕達（一人と一本）も入って行つた。「よひーじそ我が別荘へ。」

「凄い。」

『ビンの中とは思えません。』

「フツフーンそうだー。」

「で、何の様なんだ？ただこれを見したかつただけじゃないだろ。」

「お前はまだ魔法を見たことなさそだだから見してやると思つて。」こなう今の私でも魔法が使えるからな。」「

「ふん…そつか。なら見してくれ。」

「行くぞ、リク・ラク・ラ・ラック・ライラック」

詠唱を開始した。

「闇の精霊29柱、」

エヴァの周りに29個の光が浮く。

「魔法の射手連弾、闇の29矢」

それら全てが放たれる。

「どうだ、凄いだろう。」

「ああ、今見て思つたよ。僕にも教えてくれ。」

「ニヤニヤー（）そつか教えてやらん」ともないがただじやあな。」

「何が目的だ？」

「流石だ、話が早い。何簡単なことだよ。私と契約してもらひ。

「契約？」

「ああ、お前には私の//ニーステル・マギになつて貰つだけだ。」

「//ニーステル・マギ？」

「要は私が詠唱中は隙ができるだらう。その間守つて欲しいんだよ。」

「

「いいだらう。」

「では、口をつむれ。」

僕は口を開いた。

すると甘い香りが……

—  
? ? ? ?

驚き田を開けると近くにエヴァの顔があつた。

— 1 —

なんだ? 以外と二ふなんたな  
顔が赤いぞ

גָּדְעָן, אַתְּ רֹאֶה כָּל־עַמִּים

「フフ、まあいいこれで契約は終了だ。次に始動キーの設定だな。」

「始動キ一？」

「私が詠唱する前に言った言葉がそうだ。」

「分かつた。それじゃあそつだな・・・・」

『坊っちゃん僕の名前を入れてくださいよ。』

「分かつたよシャル。・・・・じゃあ、シャル・シェル・シャルテ  
イエ・シャルシエラ。これでいい。」

「ではそれで始動キーの設定は終わりだ。」

「今日はもう帰つていいか?」

「フフ、リリィは一日経たないと出れないんだよ。だが安心しリリィ  
での一日は外では一時間だからな。」

それから1日中魔法の練習をしていた。

刹那の部屋

「ただいま。」

「お帰り。どうしたやつれへんか。」

「ちょっとな。悪いが僕は寝る。晩御飯は冷蔵庫にあるもので済ましてくれ。」

「「あ、ああ。」」

そう言って僕は自分の部屋に戻つて行つた。

## 番外編 休日（前書き）

本編の合間の日常風景

今日の名言

僕は……過去を断ち切る

『リオン（ジユーダス）』

……どんな過去があるんだ。

『聴き手エヴァ』

知りたいんですか？

『ソーディアン・シャルティエ』

## 番外編 休日

今日は休み

龍宮と刹那は朝早くから少し出かけている

と言つたので一日中、本を読もうと思つていたのだが、

ここには・・・

「リオン買い物に行くぞー！」

「何故だ？」

「お前の服装に納得がいかん！」

「ど二」が！と言つたお前にそんな事を言われる筋合いはない！僕が  
どんな服を着ようが僕の勝手だろー！」

「うひうひ私はお前の師匠だぞ、言つ事を聞け！」

「マ、マスター。さなり朝に押し掛けたそれはないかと。」

「もう8時だぞ！」

「他のクラスメイトはまだ寝ている人も居ます。」

「それよりお前に学園から出れないんじゃないのか？」

「大丈夫だ！ 学園の中に服屋はある。」

「しかしマスター、まだ服屋は開いてません。」

確かにまだ開いていないだろ？

「仕方ない、なら午後から行くぞ。予定開けとくがいい。」

そう言って一人は帰つて行つた

『大変ですね坊っちゃん？』

「ああ、」

そうして僕は午後になるまで落ち着いて読書をしようとしたのだが、帰ってきた刹那に捕まり修行に付き合わされた。

午後

僕はエヴァの家に向かつた。

「行くぞー。」

そう言って腕を引っ張られる

「おい、腕を引っ張るなー。」

「まあまあリオンさん落ち着いて、マスターも嬉しいんですよ。人とあまり出掛けないので。」

「ふん！だがりと言つて毎回これじゃあ気が休まらん。……だが今田べりいは付き合つてやるぞ。／＼／＼」

『坊っちゃんもあまり他人と買い物に行きませんでしたからね。』

「もうなんですか。」

「シャル、余計なことを言つくなー。」

そつぱつエヴァに引っ張られて行く

「リオンさん、マスターの願いに付き合っていただきありがとう」  
ぞこます。」

そう言つたのは聞こえなかつた。

店内

「／＼＼＼エヴァ……貴様～～」

「おお、似合つているぞリオン」

『坊っちゃん・・・』

「僕に文物を着せるな！男物を選べ！」

「似合つと思つのだが。」

「普段着だぞ！スカートなんかはけるか（くそー何で僕がこんな格好を、）」

リオン今スカートをはき髪をピンで止めている。

「じゃあじつは？」

またスカートを持っている

「もう帰してくれ。？」

それから一時間付き合はされた。

(つ、疲れた。)

「楽しかったなリオンのスカート姿。」

「マスター結局買いませんでしたね。」

「ん？まあいいんだよ。ただ遊びたかっただけだしな。」

エヴァはそう言つてあるきだした。

(そつか、あんな性格だから友人と遊ぶ事がなくて寂しかったんだ  
な。)

エヴァ「どうした？リオン」

「この辺に止まっていたらしく。ヒュアが声をかけてくる。

「今度だー。」

「？」

「今度の休みをあけておけ。」

「何でだ？」

「今日買えなかつた服を買いに行くんだー。付き合いで。」

「…………ああー、ナニとくよ

やつして僕たちは帰つて行つた

(たまこは「んな休日も遅くなーい。」)

『（素直じゃないですね）』  
やつこ：休日は週末でいった

## 桜通りの魔法使い（前書き）

今日の誓言

俺が……俺たちが、ガンダムだ!!

『刹那・F・セイエイ』

べツ、別に甘いものなんて好きじゃないんだからな!!

『甘いもの好きリオン』

ならこのプリンは私が貰つ

『リオンをからかって遊ぶエヴァ』

## 桜通りの魔法使い

エヴァの従者になつてから慌ただしかった。

まず、高校生と場所の取り合いでドッジボールをしたり、テストがありその結果が悪いとネギが止めなければならなくなるといいつつ、なのでクラス全体で勉強したりした。

それから数日たち、  
ティーをやつたりした。

それから数日たち、  
エヴァの家

「もうすぐ私の封印を解く。」

「そうか。」

「なんだそのリアクションはーのりがわるこぞ貴様。」

「別に、ただ最近その話ばつかで聞をあきた。」

「仕方ないだろー。15年間も学校にて通つて居るのだが。あ二つの父のせいだ。」

「それで今晚は満月だつたか?」

「ああ、また血を吸いに行く。」

「まあ、ネギを相手にするとき呼べ。」

「何を言つて居る?」

「だから、「今日は多分来るが。やうしかけるからな。」はあ、分かつたよマスター。」

「じゃあ夜に来るからな。」

そう言つて僕は部屋に帰つて行つた。

## リオンの部屋

「なぜ貴様がここで寝ている?」

『そりですよ、坊っちゃんの布団で寝ていいのは僕だけですよー。』

「短い再開だつたな。」

『ま、待つて坊っちゃん。冗談、冗談ですって。』

「まあいい、おい起きろ刹那。」

「~~~~~」

「起きた刹那……」

「…………はー」

「起きたか。」

「なぜあなたが此処に?」

「ソレが僕の部屋だからだ。」

「あつ!私貴方に用事があつたんです。」

「なんだ?」

「最近夜は物騒なので見回りを強化する」としてばかりでなく回る  
ことになりました。」

「分かつた。(好都合だ。)」

それから僕は夜まで刹那と剣の修行をした。夜校舎の上

「暇だな。」

『暇ですね。』

「N先生のパソコンを持つてきました。」

「本當かー…食べるー。」

そんなやうに取りをしながらエヴァを待つていると。

『もうすぐ着くよ。坊やがいるから用意をしておけ。』

「アマスター（エヴァ）。」「解マスター（エヴァ）。」

やつまつとすぐ来た。

エヴァのマントが飛ばされる。

「やるじゃないか先生。」

「これで僕の勝ちですね、約束通り教えてもらいますよ何でこんなことしたのかそれに……お父さんのことも」

「お前の親父……すなわち……『サウザントマスター』の二とか、フフ」

ネギの顔に動搖が走る。

「と、とにかく……魔力もなくマントも触媒もないあなたに勝ち目はないですよ……素直に」

「……これで勝つたつもりなのか?」

スッ

ズシャン

一つの影が来た。

「ああ、お前の得意な呪文を唱えてみるがいい。」

「（新手？仲間がいたのか。仕方ない三人まとめて）ラス・テル・マ・スキル・・・風の精霊11人縛鎖となりて敵を捕まえろ」

「ふ・・・」

スツ

影が一人動いた。

「サギ、あたつあたた？えつあれ！？き、きみはウチのクラスの・・・」

ペコリ

お辞儀をする茶々丸

エヴァ「改めて紹介しよう私のパートナー3-A出席番号10番の茶々丸とリオンだ。二人とも私のミニステル・マギだ」

「えつ、なつ、ええ～！茶々丸さんとリオンさんがあなたのパートナー？」

「そうだ、パートナーのいないお前ではわたしには勝てんぞ。」

「なつ、パートナーくらいなくたって風の精霊11人・・・」

スッペシ！

「風の、」

ベシ！

(なつ)

「驚いたか、元々魔法使いの従者とは戦いのための道具だ。我々魔法使いは呪文詠唱中完全に無防備となり攻撃を受ければ呪文は完成しない。そこを盾となり剣となつて守護するのが従者の本来の使命だ。つまり、パートナーのいないお前は我々三人には勝てないと言うことだ。」

「（そそそんな）知らなかつたよ。」

「茶々丸」

「クリ

「申し訳ありませんネギ先生マスターの命令ですのです。」

首を閉められるネギ

「ふふふようやくこの田が来たか、お前が学園に来てから今日という日を待ちわびていたぞ。お前が学園に来ると聞いてからの半年間ひょっこ魔法使いのお前に対抗できる力をつけるため仲間を増やし危険を冒してまで学園生徒の血を集めた甲斐があった。これで奴が私にかけた呪いも解ける。」

「あまり僕は必要なやつだな。茶々丸僕は帰るが。」

「どうぞお気を付けて。」

「帰っちゃうんですか？」

「ああ、お前が捕まつた時点で僕がいる意味がないからな。じゃあなエヴァ。つて聞いてないか。」

そうして僕は帰つて行つた。

そしてリオンが帰つてからアスナが来てエヴァの邪魔をしたのを知つたのは次の日の学校だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5378n/>

---

ネギまin坊っちゃん

2010年10月9日04時32分発行